

零本『好色閻魔歌舞記』小考

杉 本 和 寛

本稿で取り上げる『好色閻魔歌舞記』（個人蔵）は、六卷六冊の一之巻のみ、それも半ばが剥ぎ取られたような形で残存する零本である。しかしながら、この残骸に等しい状態の本により、西沢一風の作品を新たに追加することができ、さらには従来改題名『役者小夜衣』（享保二年「二七一七」刊）として取り上げられてきた作品の原題名が、この『好色閻魔歌舞記』であることを確認できる。こうした状況をふまえ、以下においてこの『好色閻魔歌舞記』を紹介するとともに、二、三のことからについて考察を加えようとするものがある。

『好色閻魔歌舞記』（改題本『役者小夜衣』）は、既に亡くなった初代中村七三郎および二代目嵐三右衛門の妻・妾が尼となり、各々の相手に今一目会いたさに地獄に向かうところから始まる。地獄では、亡人となった役者たちによる芝居の興行などもおこなわれるが、二人の尼や遊女の亡人たちが、閻魔大王および皇后の囚われ人になっ

たことに端を発し、さらには葬頭川の姥御前的大王に対する嫉妬・恨みも絡み、七三郎・三右衛門指揮の下に、役者たちが得意の武者などに配役され、大王や鬼達への謀反を起こす。蜂起軍優勢の中、釈尊に使わされた地藏菩薩の取りなしで事なきを得、心を入れ替えた閻魔大王は元の務めに戻り、役者達は極楽に向かう。最後に二人の尼が娑婆世界に帰されると、それまでのことは全て夢の中の出来事であった、という内容である。

本作品では、初代中村七三郎一周忌追善の当て込みや、数多くの物故役者達の配役という趣向、さらには、先行作品である『小夜嵐』に倣った地獄での亡人の武者達と閻魔大王・鬼の合戦という構想が柱となっている。以下、書誌的事項について検討を加えた上で、作品の内容についても、歌舞伎の利用・『小夜嵐』の利用という点から見ていくこととする。

一 『好色閻魔歌舞記』の書誌・作者・刊年など

まずは、『好色閻魔歌舞記』の書誌的事項について、簡単に説明をおこなっておく。

表紙 薄茶色無地（原表紙か）。縦十二・八糎横十八・五糎。

本文 四周単辺。縦十・六糎横十六・五糎。半丁十五行毎行十八字前後。

構成 一之巻（序一丁「一」、目録一丁「二」、本文「推定」十八丁「三一六」「以下丁付破損」）。

挿絵 六ウ（本来、次丁オと見開か）、12丁目ウ13丁目オ（見開）、17丁目ウ18丁目オ（見開）。

題簽 なし。

序題 「好色閻魔歌舞記」。

目録題 「好色閻魔歌舞記」。

内題 「好色閻魔歌舞記」。

尾題 「好色ゑんまかぶき」「以下破損」。

板心 「ゑんま 巻一（丁数）」。

句読 残存する部分については全て「・」。

序記 「宝永六吉日 ○冥途通之男／西澤氏某」。

画者 未詳。

先に触れた『役者小夜衣』（ケンブリッジ大学アストン文庫所蔵）

については、長谷川強氏、林望氏による報告が備わる。^(一)それらとの零本から併せて考えると、『役者小夜衣』は『好色閻魔歌舞記』三・六之巻の目録題・章題・尾題・板心を改め、三・四之巻を中之巻、五・六之巻を下之巻としたものが、現在残された状態であると考えられる。

作者については、長谷川氏が『役者小夜衣』の作風・板式などから西沢一風であることを推測し、^(二)さらには井上和人氏も連声表記や用字の特徴から一風作であることを提言してきたが、^(三)序文の署名によりそのことが確定された。

刊年については、これも長谷川氏が『役者小夜衣』における染川十郎兵衛、坂田藤十郎の生没に関する記述から宝永六年「一七〇九」前半と推定したが、^(四)本書の序記により宝永六年、さらには本文中の二人の尼の会話から春頃の刊行ではないかと思われる。

また長谷川氏は、板式・挿絵画風より板元を菊屋七郎兵衛と推定、^(五)確証はないものの従うべきであろう。この期の菊屋の出板予告・既刊広告等において、現在のところ『好色閻魔歌舞記』の名は確認されておらず、急な刊行であったこと、あるいは、刊行後何らかのトラブルのあったことも想像される。

改題改編本『役者小夜衣』の板元である油屋平右衛門については、その屋号・所付けから、一風作『御前義経記』（元禄十三年「一七〇〇」刊）・『寛濶曾我物語』（元禄十四年刊）の板元の一つ油屋与兵衛との関連が想定される。^(六)宝永四年には『和州諸將軍伝』を油屋与兵

衛と共に刊行して^(七)おり、一風―油屋与兵衛―油屋平右衛門という筋で何らかの働きかけがあり、改題再印が行われた可能性も考えられる。

二 二人の尼の設定および歌舞伎利用

本作が、刊行の前年宝永五年二月四日に没した、初代中村七三郎の一周忌を当て込んだものであることは間違いない。尼の一人が、みづからは江戸役者中村七三郎が思ひもの。つまの七三郎は過つる春世をさり給ひぬ。我も友にとなげきしが。一^一家にさゝられおしからぬ命をながらゑ。せめて御跡をとむらいまいらせんとかゝる姿と也。なじみの里をしのび出是まてまよひ来りぬ。と説明していることからそのことはうかがえる。その一方で、もう一人の尼が嵐三右衛門の妾であることを告白していることは興味深い。

我もおなじ恋衣きつゝなれにしつまこそは。およそ三ヶの津にかくれなき嵐三右衛門とて。草も木もふくになびかぬ人もなく。又有間敷諸芸の達人。ぬし有袖としりながら。人めしのぶの通路にもる人もなきしのびづま。おないぎ様が二世なれば我は三世の諸仏をかけ。かはるなかはるまひと。よい中たへてつるに行無。情のあらしと成給ひぬ。めいどかうせんの旅に只ひとり。あゆみならぬ死出の道。手に手を取てゆかんことをなげきし

に。まゝならぬ世にぜひなく。ひとりの母のなげきにまよひ。かはせしむつ言のあだ成けるもかなし。かゝるすがたとなるからは行つきしだいなりしだい。野にふし山をすみかとし。此五とせの春をくらし今爰にきたり。(傍線筆者)

とあり、三右衛門の死後一人の母にひかれて後を追うこともできず、やがて尼となって諸方をさまようこと五年目を迎えたのがこの宝永六年の春という設定であるから、元禄十四年十一月二十五日に亡くなった、二代目嵐三右衛門の思われ人とするのが妥当であろう。七三郎の尼と「我もおなじ恋衣」としながらも、傍線部のように、「ぬし有袖としりながら。人めしのぶの通路にもる人もなきしのびづま。おないぎ様が二世なれば我は三世の諸仏をかけ」と、妻ではない立場を強調するのは、二代目三右衛門の妻いちの存在が、芝居関係者の間では勿論、一般の読者にも、三右衛門追善の『嵐都土』^(八)(元禄十四年刊、菊屋七郎兵衛板) などにより知られていたことをふまえており、読者にとっては現実味を帯びた人物設定である。

いずれも近年亡くなった劇界を代表する看板役者の思われ人を尼になし、亡き人への思いから夢中において地獄へと誘われて行くという構成であるが、ここで嵐三右衛門という名には、今ひとつ初代へのイメージも重ねられているように思われる。すなわち、本書の趣向は元禄十一年刊『小夜嵐』に大きく依っており、序文でそのことを謳うとともに、一之巻目録においては「新小夜嵐」であることを標榜している。初代三右衛門が丸小から嵐に改名する契機となっ

たという狂言名『小夜嵐』^(九)から連想されるイメージは、その演目の中身に関係なく「小夜嵐物」、つまり地獄での合戦物に読者を誘い込む役割を果たしており、それを喚起する嵐三右衛門という名前は、一周忌への当て込みが見られる七三郎という名前とは、異なった機能^(一〇)を課せられている。『役者小夜衣』中之巻(『好色閻魔哥舞記』では四之巻に相当)における役者の中に、「祖父嵐三右衛門」(初代)と「親嵐三右衛門」(二代目)の両者の名が挙がるのも、二代続いての名優であることは勿論、「小夜嵐物」という全体の構成に関わる設定の意図が感じられるのである。

その四之巻(『役者小夜衣』中之巻)において、地獄に落ちた亡人の役者達五十名を、源平の武者をはじめとする軍記物の登場人物に配し、七三郎・三右衛門の作戦に則り、閻魔王率いる地獄軍に戦いを挑むというのが、本作における大きな趣向の一つである。既に井上氏の詳細な調査・分析により、その配役については以下のような傾向が指摘されている^(一〇)。

(1) 立役・敵役については、存生時の当たり役と地獄での配役の一致を確認できる者、あるいはその役を演じた可能性が大きい者が多く、また芸風への配慮もなされており、当該役者生前の役柄に忠実な記述が多いと考えられること。

(2) 女方・若衆方・道外方等においては、実際の舞台で役柄上武者役を演じた可能性は低く、ある程度便宜的な配役であるが、役者

の芸風に配慮した記述も見られ、そのことを念頭に読むことが求められる箇所もあること。

この四の巻に類似の趣向として、一之巻の二では、地獄の大赦の期間のうち二月十五日一日限りの芝居興行を賽の河原で行なうこと、また、その演目や配役などが書かれている。残念ながら破損が激しく、残された部分から想像を広げるしかないが、七三郎・三右衛門を特筆した上で、地獄故に亡人となったあまたの役者を抱えており、娑婆世界ではみられないような配役であることをうかがわせるような記述がある。そのためか、実際に生前に演じた役柄については「しやばめいども同役」とわざわざ注記しており、この点、四之巻における配役傾向とは異なった方向性を持っているようである。

演目は、第一が「樽屋」と見え、「樽屋おせん」に関するものか。第三では「今市善右」「みのや平左衛門」の役名が見え、元禄八年「一六九五」十二月大坂岩井半四郎座における三勝・半七物『心中茜の色揚』かと思われる。その場合、「みのや平左衛門」を演じて「しやばめいども同役」とされるのは、座本である二代目半四郎ということになる。第四は「雁金文七」物で、「しやばめいども同役」とされているのは、文七を勤める立役の「染川(以下破れているが、おそらくは七三郎同様前年に亡くなった十郎兵衛)」であり、元禄十五年大坂松本名左衛門座における文七役が想定される^(一一)。大切の前には「曾根崎心中」物が置かれ、油屋九平次に配されているのは敵役

小野山宇治右衛門か。この後、二之巻において上演場面が描写されているかどうかは不明である。

筋の展開としては、随黄・雷天の二鬼が思いを寄せた二人の尼が、閻魔大王の恋慕の対象となり、生前名高い遊女であった亡人達とともに、その側に置かれることにより、地獄の騒動が勃発することになる。

三 『小夜嵐』の利用

何度か触れたように、本作品の構想は元禄十一年刊『小夜嵐』に大きく依っており、自ら「新小夜嵐」を標榜している。

『小夜嵐』では、閻魔大王の慈悲により、釈迦入滅後二千五百年忌にあたり、涅槃（二月十五日）の前後十五日間の大赦が行なわれる。その中で地獄に落ちた源平の武将達を中心に、閻魔王をはじめとする地獄の諸王を攻める戦いが始まり、閻魔達は追い詰められるが、釈尊・弥陀の仲裁により平穏に戻るといふものである。『好色閻魔歌舞記』では、同じように閻魔大王による大赦を設定した上で、まずは物故後地獄に落ちた役者達に芝居を演じさせる。さらには二人の尼の奪還や、葬頭川の姥御前の嫉妬を晴らすため、七三郎・三右衛門の指揮の下、役者達に源平をはじめとした歴史上の武者役を配し、『小夜嵐』同様閻魔大王やその眷属を打ち負かしていくのである。

そうした『小夜嵐』からの改変という点では、古今の役者、それ

も五十名の評判・イメージを巧みに生かしながら、『小夜嵐』の世界を利用したところに、一風の手柄がある。井上氏による「最新の流行を追いかける時以上に、歌舞伎や役者に関する情報が必要となる。長年にわたる演劇情報を活かし、趣向の一つとした点で、本作（筆者注：ここでは改題本『役者小夜衣』）に注目しておきたい」との評価もうなづかれるところである。

また、閻魔王の尼達や遊女達への耽溺のみならず、『小夜嵐』では目立たない葬頭川の姥御前を大きく取り上げ、閻魔王との過去の恋愛譚を作り上げた上で、その破綻・嫉妬から姥御前自らが皇后になりかわろうとする野望を描いたところにも、書名の「好色」性を確保している。

その一方で、『小夜嵐』の記述をそのまま剽窃する部分が、特に地獄そのものを描写する箇所においてみられる。たとえば、翻刻10丁目ウ「抑ちごくのあるじゑんま王宮と申は」以下は、『小夜嵐』の一〇〇以降とほぼ同文であり、13丁目ウにも『小夜嵐』一の二からの剽窃が見られる。同様のことは、三之巻以降（役者小夜衣）相当部分）にも散見され、『小夜嵐』をふまえたつも一風独自の趣向を凝らした箇所から、行文も含めて大きく『小夜嵐』に依拠している箇所まで、その利用方法には大きな幅を見ることができるのである。

『好色閻魔歌舞記』は、役者の死・追善といったトピックの利用、

新旧の役者の配役に関する趣向のように、豊富な演劇の知識・情報を活かしながら「新」小夜嵐としての新しみを主張している部分に、作者の工夫を看取できる。『義経記』（『御前義経記』）・『曾我物語』（『寛潤曾我物語』）・『平家物語』（『風流今平家』）等周知の古典を好色化・現代化により「やつす」、あるいは『新色五巻書』・『傾城武道桜』・『伊達髪五人男』等のように、これまた世間周知の事件を、読者の既知の情報を利用しながら「やつす」といった一風の手法は、本作においても『小夜嵐』という比較的近い時期に刊行された書物を利用しながら踏襲されている。典拠への安易な依拠という面も見られるが、自身の方法論を活かしつつ、演劇利用に長じた一風の力量が示された作品といえるだろう。

注

- (一) 長谷川強『浮世草子考証年表―宝永以降―』（昭和五九、青裳堂書店）、林望「影印本の条件―『役者小夜衣』を例として―」（『早稲田大学蔵資料影印叢書国書篇第九巻』『浮世草子集』月報、昭和六一、早稲田大学出版部）。一風作『風流三國志』（宝永五年刊）の初・二巻の内題・尾題・見開挿絵を除いた物を上巻、『役者小夜（狭夜衣）』と改題された作品の三・四巻を中巻、五・六巻を下巻として、三巻三冊の体裁をとる。『役者小夜衣』の刊記は「享保二年丁酉正月吉日／大坂高麗橋西／油屋平右衛門板」となっている。

- (二) 注(一)前掲書、および、再版『浮世草子の研究』（平成三、桜楓社）
(三) 井上和人「表記から見た一風浮世草子存疑作―連声表記と用字を材料に―」（『近世文芸研究と評論』七三、平成一九）
(四) 長谷川前掲(一)および(二)。
(五) 同前。
(六) 『寛潤曾我物語』刊記に「大坂高麗橋筋西 油屋 与兵衛 開板」とある。油屋平右衛門の所付は、『女重宝記大成』（宝永八年刊）では「大坂高麗橋筋大豆葉町」となっており、近隣に住む一族かと推測される。

- (七) 同書刊記には、
大坂高麗橋西 油屋 与兵衛
同名 板
安上平右衛門行
とある。

- (八) 鳥越文蔵『元禄歌舞伎攷』（平成三、八木書店）所収、国立国会図書館所蔵本翻刻による。
(九) 『日本古典文学大辞典 第一巻』（昭和五八、岩波書店）「嵐三右衛門」の項目解説では、寛文頃上演で、『けいせい小夜嵐』とする。このことは、鳥越前掲(八)所収「第四部 元禄期の名優像―大坂の役者たち―」によれば、寛延三年「二七五〇」刊『新撰古今役者大全』以前に見出せないところがあるが、元禄・宝永頃の芝居好きには周知のことと推測される。

- (一〇) 井上和人「『役者小夜衣』小考―役者と配役―」（『近世文芸研究

と評論』五七、平成一一）。

(一一) 『日本古典文学大辞典 第二卷』(昭和五九、岩波書店)「雁金文七秋の霜」(横山正執筆)の項目解説による。

(一二) 井上前掲(一〇)。

〔付記〕 本稿は科学研究費補助金(研究課題番号・二〇五二〇一七九)による成果の一部である。

〔資料紹介〕翻刻〈零本〉『好色閻魔歌舞記』一之巻

(凡例)

一、翻刻に際しては、原則的に現行通用の字体を用いたが、一部旧字体を用いた箇所もある。

二、原本は破損が激しいため、以下のような措置をおこなった。

(1) 六丁目までは原本の丁付通り漢数字を用いた。それ以降は実丁数として算用数字を用い、【】の中に示した。また、7丁目以降は表・裏の移りごとに改行をおこなった。

(2) 破損箇所についてはその都度()の中に示した。また、かけている字数が推測される箇所については、□で字数分を示した。また、破損しているものの、推定できる文字については「」で括った。

(3) 本書本文の行数は十五行であるため、行数が推定できる箇所については、①、②・・・⑭、⑮のように示した。

三、宛字・誤字については原本のまま翻刻をおこなった。

好色閻魔歌舞記

序

夢路の駒に鞭を討。あゆむにまかせ。行末なんとやらすまぬ在所にいたりぬ。来れる人にとふ。汝しらずや生るゝ時きやつといへば。死して爰に来る。所かはれば品々のあいさつ。めつたに角の有顔。

ひたいには牛の角ごときもの。眼玉鏡にひとしく。来るもくすはだに虎の草のふんどし。是地獄の鬼たり。縁にひかれ生たる鬼を見る目かぐはな有べし。なんと此(二オ)地にかはりしことなきやととふ。答云やがて閻魔歌舞記はじまる。見よくとうなづく。是かはつた趣興にもあらず。古小夜嵐といふ書有を見ずや。鬼共いかつて汝も閻魔だをし。はやく娑婆多され。活くといふかと思へば。我が住軒の雀かしましく夢さめたり。冥途の芝居見ぬさき。閻魔歌舞記といふに思ひつゐて。是を六冊にすることしやほんばに

宝永六

○冥途通之男

吉日

西澤氏 某 (二ウ)

好色閻魔歌舞記

一之巻 目録

○新小夜嵐

六道辻通夜物語

一 愛別離苦の涙

一 嵐に残る髪切女

一 中村の里ちり桜

一 鬼の目にも涙川

▲ 随黄雷天鬼が恋

まよひの渚や

きのどくの山 (二オ)

○ 釈尊追善歌舞妓

一 女心の殺生

一 地獄の棚おろし

一 とわず語の影言

一 やぐら太鼓の呼子鳥

一 灑の川原の番付

▲ 妻なし千鳥

色によまる、鬼の鼻毛 (二ウ)

好色閻魔歌舞記 一

○ 六道辻通夜物語

行末しらぬ浮世。うつりかはれるこそ変化の常と思ひながら。去年もはや暮。春霞の朝長閑に。四隣の梢もうごきよろづ温和にして。心もいさましげなるこそうれし。樂の有里をのがれ身をすみ衣になし。願の玉の縋も切なん程に仏名となへ。昔の有様をもわすれ。無人のため諸国あんぎやと心ざし。又は身の修行にもなりなんと。さしもすてがたき武蔵野を跡に見のこし。心ざす国もなく心にまかせあゆみ行。里の童咲(三オ)乱たる花を手ごとに折もち。旅人にさしつけ。わずかのあたへをもらつて世わたるもやさし。きのふと過けふの入日西山にかたむく比。都なれや東山のほとり。六波羅密寺と名に高き観音堂をおがみ。六道の辻とかやいへる所にもふてぬれば。別れし人に逢ときく。鐘かうくとなるもつねならず哀にきこ

へ。有しこと共思ひ出し。衣ころもの袖うでもうく涙川なみかわ。渡わたりに人もがな爰あなのこと共尋ね度所に。年とし比ひ三十計さんじゅうけいの尼衣あまの袖うでをしぼりあげ。づたの袋ふくろを前にかけ。風呂敷ふろしき包つつみうしろにおひ。手にはすげなる笠かさの雫しづく。かはくまもなきおもぎしいやしからず。いにしへよし有風情ふせい。おなしく爰あなにもふで。あてなきかたを念比ねんひにはいしけれ（三ウ）ば。前さきなる尼立あまよりそつじながら尋ね度ことの候あと。跡成人あとじんの申せしは六道むだうの辻つじと計けいにて。くはしきこともぞんじませねば。そと御物ごぶつがたりあれかし。あれに見へたる堂どうにいかめしき姿すがたの見へけるは。いか成る仏ほとけにておわしけるぞ。尼聞あまきこて御身ごみもおなじ尼衣あまぎ。同修行どうしゆぎやうの旅たびの空そら。いづくをそことさだめぬこそ出家しゆけなれ。殊ことに当地あたはじめてと見へたり。まづあの像さうは地獄ぢごくのあるじゑんま大王おほみかみの御すがた。則すなはち小野おの、篁たかむらの御作ごさくにて霊現れいげんあらたにまします。アレアノつり鐘かねを。六道むだうのかねとさして。毎年まいねん七月しちがつなきたままつる比ひには。此こかねをつき亡者もうじやをむかひ奉る。誠まことに地獄極楽ぢごくごくらく目前まへたり。此こゑんま王おみに願ねがをかくれば。死ししてわかれし人ひとにあはせん（四オ）との。ちかひを頼たのにもふずる事こと。我われも思おもひの露つゆの魂たま。わかれし人ひとの佛ほとけさらにわする、ことなく。夢現ゆめげんにも見ることなし。さるによつて爰あなにもふで。なき人の姿すがた今いま一度見せさせたまへと。かんたんくだきけふみつる日に成ぬ。かたじけなくもゑんま王おみは。本地地蔵菩薩ちそうぼさつのけしんとして。衆生しゆじやうさいどをのへ此ごとく御身ごみを變へんじ。世よをさりし亡人もうじんの善惡ぜんあくをたゞし給ひ。世よに有人あるひとの見せしめ。俱生くしやうじん冥官みやうくわん其外そのほかあまたのけんぞく。前後ぜんごをしゆごす鬼おにといふはこれなり。娑婆しゃばにて惡逆あくぎやくにほこるもの。地ちごくにいたり鬼

の手にわたり。さまぐの責せめをうくる。又善心ぜんしんたれば極楽ごくらくにいたる。成仏じやうぶつすることたがひなし。扱見じやくけん申せばとし若わか。殊ことにいやしからぬ御そだち。人をも（四ウ）ぐし給はず。只老ただ人此所このところに來り給ふはいかなるゆへと尋ければ。かの尼涙あまなみだをながし情有人なさけあるひとに行ゆあひしこそうれし。今は何をかつ、まん。みづからは江戸役者やくしや中村七三郎なかつむら七三郎が思ひもの。つまの七三郎しちさんらうは過すつる春世はるをさり給ひぬ。我も友ともにとなげきしが。一いつ家けにさゑられおしからぬ命いのちをながらゑ。せめて御跡あととむらいまいらせんとかゝる姿すがたと也。なじみの里さとをしのび出で是こゝまでまよひ來りぬ。かねぐき、しにたがわぬ御咄おど。はるぐきぬる旅たびの空そら。仏ほとけの御ごないしやうにかなひけるこそ。うれし涙なみだのよすがら我も仏ほとけにねがひをかけ。哀あはれ七三郎殿おなみの佛ほとけなりと見まほしけれ。又御身ごみのうへいかなるゆへ。未いまつぼめる花はなかづら御髪ごかみおろさせ給ひしぞ。くらしからずば御ものがたりあるべし。かの尼手あまてを打扱うちあは左様さやう（五オ）か世よにはにたことの有あつるものかな。我もおなじ恋衣こいころもきつ、なれにしつまこそは。およそ三ヶがの津つにかくれなき嵐あらし三右衛門さんゑもんとて。草くさも木もふくになびかぬ人もなく。又有ある間敷諸芸しよぎの達人たつじん。ぬし有袖あそでとしりながら。人めしのぶの通路かみちにもる人もなきしのびづま。おないぎ様が二世なれば我は三世の諸仏しよぶつをかけ。かはるなかはるまひと。よい中たへてつるに行無ゆくむ。常じやうのあらしと成給ひぬ。めいどかうせんの旅たびに只ひとり。あゆみならわぬ死出しでの道みち。手に手を取てゆかんことをなげきしに。ま、ならぬ世にぜひなく。ひとりの母のなげきにまよひ。かはせしむつ言ことのあだ成けるもかなし。かゝるすがたとなる

からは行つきしだいなりしだい。野にふし山をすみかとし。此五と
 せの春をくらし今爰にきたり。(五ウ)年比のなつかしさを此ゑんま
 王に申こめ。ぜひにあふせの浪枕ならぶことは片糸の。みだれ心
 をとひてたべと。近比むりな願をかけ。こよひは爰に草枕衣かたし
 くあかしなん。思ひもおなじ思ひ人。ほまれもおなじ役者。二とも
 さがらぬ嵐中村。つまとくをかきねおなじ御法の友念仏。南無阿
 みだ仏のかねのかず七つとき、なし。夢むすばんと思ふ比。いづく
 ともなく赤白の鬼。でんちう羽織にはかまのも、立取二本刀のさ
 しこなし。壺人は高札をかたけ。今壺人は奉行役。頭をふりまはし
 いかめしげに来る。二人の厄生たる心地なくわちくわなくふる
 ひ。これ正身の鬼。爰に来るは我くを合せんとのか。又かなは
 ざるねがひをにくみ。冥途のつかいとおぼへたり。何とぞ此ばをの
 がれ(六オ)

挿絵第一図(六ウ)

〔7丁目オ・ウ全体破〕

①めし様子(この行以下破) ②め見のが(この行以下破) ③に

(この丁オ以下破)〔8丁目オ〕

⑪は天上人間はいふにおよは「す」(この行以下破) ⑫非情の草木
 だに。仏恩うけざるもの(この行以下破) ⑬無仏世界預弥地獄
 のあるじ閻魔(この行以下破) ⑭仏恩追善供養のため罪人「共
 を」(この行以下破) ⑮涅槃の日を中に取前後七「日」(この丁ウ
 以下破)〔8丁目ウ〕

やめられ。罪人共心の。ことくなくさむべきむね。中にも三ヶの津
 の役者をあつめ。さいのかはらに芝居をたて。歌舞記狂言をはじめ
 らるゝこと。うとふもまふも法の声此ゑんにひかれ。浅ましき亡人
 の心をいさましめ給ふも。是大「王」の御慈悲たり。二月十五日一
 日をかぎり名人たる芸者をあつめ。則ゑん王座本とし。□□の花を
 ふらし。思ひく心行たい所「見た」い所。心のま、あそぶべき
 との御ふれ。我、兩人うけ給はる。又此札は役者付殊に嵐中村を立
 物とし。巻頭巻幅にかけり。さほど兩人なつかしくば我、がのぞみ
 をかなへ給へ。しからは「芝居」□□「見物」させ。又恋しき人に
 もあ(此丁オ以下破)〔9丁目オ〕

(冒頭二行破) わかれ□□□□せんとはいかなる「袖」□□□□□
 其御詞のいつわりなくば。此身はとんと□□□にまかせまいらせ候
 と。もつれもたるゝしかけもの。鬼の目にさへ涙川わたりに舟とよ
 ろこび。しからは爰をふたりねの。枕を今とだきつかれ。冥途の人
 は心みぢかし。惣じて枕「か」はすにはたがいの心みだれ髪。のば
 してそして□後。いふにいはれぬ思ひ草。根から葉からちこくゑ
 なりとつれ給へ。これでもいやかと手をと「ら」れ。二人の鬼共腰
 をぬかし。わに口よりよだれをながし。なんの因果に鬼となりちご
 くすまいをすることぞ。おなじ浮世にすむならばしやばせかいこ
 そうらやまし。はやとく来れと夕間ぐれ(9丁目ウ)
 雲のうきはし夢現。わたりくてべうくたる川原にこそは着たり
 ぬ

二
地獄ぢごくの棚たなおろし

雲のあしはやく。吹みだれたる木の葉のごとくこちふく風血なまぐさく。かうくたる所に大河有爰はいづくと尋ねければ。二人□「鬼」こたへ是なん三津瀬川といゑりあれ川ばたに芝居興行の札有。立より一つくよみおはり二人涙をながし。先立給ひし役者衆あまたの中に。御身とわがつま殊にすぐれ筆ぶとにかゝれたり。此ごとく名じん人より合なば。役まわらずして狂言の出来ば見へず。あ□□□なからんといへば。雷天鬼いはく。□□□□□あらば相應の役わりなるべし□□□□□□□□□□（10丁目オ）

殊にあてめを取。来年又外の□□□□身にもあらねば。小詰役

もつ□□□□□りやうけんより談合たんかうきはまり。ワキ狂□□□立此衆
への役やくわり。なんと地獄ぢごくの手びろさ。神武しんむしかたか様のしはい見た
ことあるまじ。そち立は仕合。恋ゆへなればこそならぬ所を見せも
すれ。かならずね物語をわすれまいと口かためるもおかし。二人の
尼心あまの内うちにはおかし「か」りしが。今なんのかのといはゞいかなる
うきめか見ん。□にかく恋しき人にあふこそうれし。何事も□でし
まへとうなづきあい。ハテくどいさうでなふては。扱又ちごくといふ
はいかなる所をさして申ぞ我、がつまなどいづくにかおわします。

随すい黄わう聞くとてものことにかたつてきかせん。抑おさぢぢごくのあるじゑん
ま王わう宮くうと申まうは。人にん間げんの地ちより五百い百ひゃく奥おく繕ぜん（10丁目ウ）

な
 那をへだて。無仏世界預弥国の中央にあたれり。皇居より東にあた
 る
 り剣の山あり。うしとらの方に八大地獄有。うたつのかたに死出の

零本『好色閻魔歌舞記』小考

山八苦堂^{はつくとどう}。たつみよりいぬいの間に川有。これを葬頭川^{さうづ}といへり。
 ながる、末^{すへ}は無辺^{むへん}の海蒼海^{うみさうかい}につゞく。城^{じやう}のうしろに霞^{かすみ}がだけ。山彦^{やまひこ}。
 谷^{たに}をへだて左のかたにわしが□「け」。右のかたにいそろい山。前は^{まへ}
 剛鉄藍^{がうてつらん}と「い」ふ平^{へう}くたる陸地^{くかぢ}。およそ十万八千里の間に。十王
 住城^{ぢうじやう}をかまへ。一億九万九千五百の眷属^{けんぞく}かしつき。所々^{しよしよ}を諸王^{しよわう}の領
 地^ちとさだめせいたうをたくし給ふ。中にもゑんま大王は十王の一と
 なし。□□界^{かい}の中央^{ちゆうわう}に帝都^{ていと}をしめ預弥国^{よみこく}□□□□とうやもふ。城内^{じやうない}
 二百八十余里^よ。皇^{くわう}「居」□□□□四方^{しほう}についじ外^{そと}に七重^{ななえ}の堀^{ほり}。□□

□□□□（11丁目オ）

もつて高さ三十丈につきあげ□□□□□□重鉄のやぐら。八方にくろがねの□□□□宮殿の数六十四殿増舎は数を「し」□□楼閣中有雲狗殿と号す。高樓有□高さ中ばに雲をまき。日月手に取ばかりなれば天等闇共いゑり。余方のけいもん四はんにひゞき。庭上籬中かくやくたり。地にはこがねのいさごをまき。ちまたに銀「屑」をしき。純金のきさはし瑪瑙のはしら。さ□□のゆきげたすいしやうの戸びら。瑠璃のしとみ琥珀のうつばり。鳳の瓦は五色にかゝやき。宮殿の軒をならべろうかくつまをかさねたり。遠山にのこる雪。霞ながらに風吹は軒ばの梅のさきにほひ。うぐひすの声めづらしき初桜。松かげに見る突山より（11丁目ウ）

ながるゝ滝の水さゝくとして又しづかなりわたせるかけはしは玉
をつらぬきこがねをのべ。池水にうかふ竜柯は。七宝をちりばめ錦
をかざり。平砂にあそぶ雁金。芦辺をわくるむら鷺。手がいの鶴の

羽をやすめ。むれるるつばさ爰かしこ。右に孔雀舞あそべば。鴛鴦ねむりをさます気色。「娑婆」にていかなればとてかゝる所やあらん。なんとけつかうなる地にてはなきやとあたりければ。厄うなづき。きゝしにまさる霊地見るよりましの物がたり。扱此所を地獄といゝ又十王の御こと。并ニ冥官俱生。其外獄卒昼夜何「を」してくらさるゝ。時に雷天鬼いはく。お□□□とひとごと。かたしけなくもぢごくといふ□□□□出世の時。九億の衆生有。三億□□□□□□【12丁目オ】

挿絵第二図（12丁目ウ）

挿絵第三図（13丁目オ）

あひ奉るこれを見仏といへり□□□□□□□□生は。仏世に出給ふことをきく是聞「法」□□□□のこる三億の衆生は仏の御名さへき□□□□宿。習のつたなきもの也。釈尊いまだぐど□□比丘と申せし時。御母摩那夫人の御靈魂尋給はんため。広泉中有にたび立給ふ。其時御身より光明をはなち。此世界を御らんじけれども。寂寞無人声にして。「迦際」もなかりければなかりければ不動明王をめし。今「し□ば」の衆生十九劫なれば。世すへになり□□□□ねがはす。神明をたつとまず。おやに「孝」□□□□主に忠なくじひたへたり。只邪見ほうい「つ」□し。悪道に随在し。極楽へ行ものなし。然間此所におごくをかまへあるじをさだめ。しやばより来れる亡人共の善悪をたゞし。悪人は（13丁目ウ）

①□□□□致べきむね□□□□ば。明王うけ②□□□□□□□□□□□□□□□□

□をめき□（この丁オ以下破【14丁目オ】）
⑭□□□□□□□□□□□□□□□□「ゑ」んま⑮□□□かたるも□□□□□□。皇后は□（14丁目ウ）
①□□□「数」百人のお妾御れんちうになみる。②□□□□□のひ。或は御湯殿間。腰□③□□□□□□□□入と（この丁オ以下破【15丁目オ】）

⑬□□□□□□□□□□めて「褒」（この行以下破）⑭□□□□□□るゝ時の返答には「我」らは坂□⑮□□□守金平が妾と申さるべし。然は何（15丁目ウ）

①事もあらし其ゆへは。過し比坂田の金平頓②死の節此地に来る。外の罪人同前に思③ひの外兵にて。ぢごくの東門□□□□□□の④□□「乱」入。既に御命の（この丁オ以下破【16丁目オ】）

⑫□□□二月十五日於灑の□□□□□⑬狂言興行するもの也

⑭○太夫本 極楽能化地蔵菩薩
⑮○座本 預弥国印閻魔大王（16丁目オ）

付タリ しぐみはしやばて見たとをり
冥途世話狂言七ツ道具
并ニ 死出の旅役者（この行以下破）

第一 樽屋

一（この丁オ以下破【17丁目オ】）

挿絵第四図（17丁目ウ）

挿絵第五図【18丁目オ】

（この丁ウここまで破）

一 今市「善右」（この行以下破）

一 みのや平左衛門（この行以下破）

しやばもめいども同役

第四 雁金文七（この行以下破）

しやばもめいども同役

かりがね文七

立役 染「川」（この行以下破）

【18丁目ウ】

一 かみなり庄九郎

敵役 「大」（この行以下破）

一 こくろん千右衛門

小話 （この行以下破）

一 ほて市右衛門（この行以下破）

一 あん「の」（この丁オ以下破）【19丁目オ】

（この丁ウここまで破）

ぬい（この行以下破）

一 同 そで 同 「吉」（この行以下破）

【19丁目ウ】

一 あぶらや九平次

敵役 小野「川」（この行以下破）

一 下人 長藏 若衆方 （この行以下破）

大切十方世界念仏（この丁オ以下破）【20丁目オ】

（この丁ウここまで破）

好色ゑんまかぶき（この丁以下破）【20丁目ウ】

父圖彙訂彙記

席

[illegible]

序文才

此よりいふと、
 かく闇魔の
 見ゆとて、
 其もわが
 書あると
 も闇魔
 道はく
 ありき
 其の
 冥達
 寺
 と六
 寶永六
 吉目
 雲澤氏

寶永六
古月

霍氏素

序文ウ

<p>好色閻魔歌舞記</p>	<p>一之巻 目録</p>	<p>新小夜嵐</p>	<p>一</p>	<p>六道辻通夜物語 愛別離苦の涙 中村のまらり 鬼の目も涙川 雷天鬼 まへに聞や このぞの山</p>
----------------	---------------	-------------	----------	---

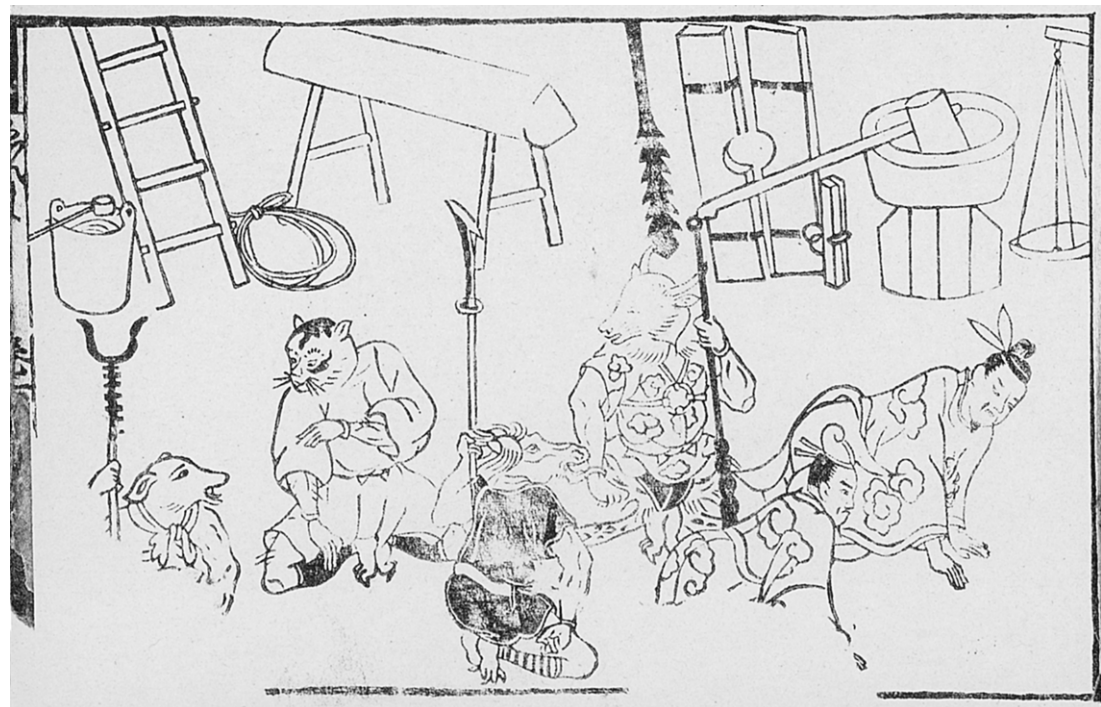
一之巻 目録オ



挿絵 第一図



挿絵 第二図



挿絵 第三図

A Preliminary Study on *Koshoku Enma Kabuki*

SUGIMOTO Kazuhiro

This brief article focuses on the first volume of *Koshoku Enma Kabuki* (1709) written by Nishizawa Ippuu. The work comprises six volumes and the first volume was newly found. This volume tells us that the author is truly Nishizawa Ippuu and that the original title of the work which is usually known as *Yakusha Sayogoromo* (1717) is actually *Koshoku Enma Kabuki*.

The volume has the following three characteristics: an anticipation for the first Nakamura Shichisaburou's first anniversary of his death, a device in which many dead players portray roles in hell, and a story based on the battle between the Great King Yama and many dead samurais in *Sayoarashi* (1698).

This paper provides bibliographic information on the volume and focuses on its use of kabuki and *Sayoarashi*. A transcript of the volume is presented in the final section.